様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：１７１０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２８１３

研究課題名（和文）進行形の意味機能を巡るState概念の精緻化に関する通時的・共時的研究

研究課題名（英文）Diachronic and Synchronic Study on Refining Stativity and Semantic Function of the BE+V-ing Construction

研究代表者
後藤　万里子（Goto, Mariko）

九州工業大学・教養教育院・教授

研究者番号：２０１８９７７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、単純形との対照におけるBe + V-ing構文の意味機能を明確化することにより、従来曖昧さを免れないままstativeと呼ばれてきた事態の輪郭を精緻化した。18世紀に出版された書簡集250冊以上を中心としたテクストで実際に使われているBe + V-ing構文を具に観察・分析し、17世紀から現在迄の動詞研究記述と照らし合わせながら、stativeが歴史を通じてBe + V-ing構文に使われ続けてきたことを実証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　Be + V-ing構文の文法性は、18世紀末以降21世紀初め迄、stative vs. non-stativeを識別する試金石としても言及されてきた。しかし、その関係は循環論的で曖昧だった。同時にBe + V-ing構文は、17世紀来単純形との区別が不明確であった。本研究は、Be + V-ing構文との関係におけるstativityを明確化したことにより、Be + V-ing構文のみならず単純現在形の用法についても教育現場での導入を容易にする原理を見出した。

研究成果の概要（英文）：This study has elaborated on conceptual entity called stativity in light of “the internal perspective” that the Be + V-ing construction takes, which effects the conceptualizer being existent in the midst of the participialized situation. At the same time, actual uses and grammatical descriptions on them for the past 300 years have also been explored diachronically as well as synchronically to demonstrate compatibility of stativity with the construction. The characterization also leads to explaining diverse phenomena of the construction more comprehensively than before.

研究分野：英語学、認知言語学、歴史言語学、語用論、英語史　規範文法　アスペクト　時制

キーワード：Stativity　Progressivity　Be + V-ing Construction　Present Tense　Simple Present　18th-century Letters　Spoken English

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

Stative は、例えば Comrie (1976: 32-39)、Langacker (1989: 254-258)等の先行研究において、「変化も境界も認識されない同質的事象」で、Be + V-ing 構文には生じないとされてきた。例えば live は stative だが、He's living in London の live は「境界が認識される一時的な状態であり、stative ではない」ので Be + V-ing 構文に現れているとされる。しかし「何を以て境界が認識され一時的と捉えるのか」や「一時的な stative は何故 stative ではないのか」等は判然としない。更に Be + V-ing 構文には「主観的な態度を表す、普通ではない特殊タイプ」があるとも言われてきたが、そのタイプに属する属さないを決める客観的な基準や輪郭も言及されることはなかった。即ち、Be + V-ing 構文と stative との関係は曖昧さを免れず循環論的であった。これは、Be + V-ing 構文の使用のあり方や stative との関係に関する学習や研究の進展を阻んでいた。

２．研究の目的

本研究の第一目的は、1 に述べた様な現状を打破することにあった。本研究は、単純形と比較して He's living in London により一時性が感じられるとすれば、Be + V-ing 構文の方が「V-ing の表す状況の途中に注目し、コミットする時間的範囲を相対的に絞る」機能を持つからであって、構文自体は、stative かどうかといった二項対立概念とは、本質的に neutral である、という仮説を立てた。それを検証すべく、文脈に照らしつつ、実例を考察することとした。

第二の目的は、18 世紀の Be + V-ing 構文の使用実態が、彼の記述の趣旨に沿っているかどうかを調べることにより I am loving を筆頭に Be + V-ing 構文を導入する Webster (1784: 24-26)の洞察の的確性を例証することであった。

第三は、進行形になり難いとされてきた「状態動詞」が表す、何らかの知覚や思考・意識・感情・存在のあり方などの意味を統合する概念的特徴を捉えることにあった。

３．研究の方法

前課題の研究対象の中心は、活版印刷英国導入開始以来現代迄の英文法書・言語哲学書・英語文法研究書における Be + V-ing 構文に関する記述だった。本研究では、それらの記述が実際の使用を反映したものであるかどうかを確認する最初のステップとして、まず、幅広いジャンルの英語文献資料をサンプリングし、実例を収集・考察した。その中で 18 世紀の Be + V-ing 構文の分析が重要課題として浮上した。18 世紀は、文法書発刊数、残存文献における Be + V-ing 構文の頻度等が激増し、しかも「現在の動きを表す役割」を果たす形が、単純形から Be + V-ing 構文へと移行した時期である。しかし 18 世紀の活版印字はデジタル化が困難で、V-ing 形は様々な品詞機能を持ち識別も難しい上で英語における出現頻度がいつの時代も極めて高いため Be + V-ing 構文はコーパス化及び同定に向かない。そこで本研究では ECCO (Eighteenth Century Collection Online)や、国内外の図書館から取り寄せたデータに一冊ずつ目を通すことにした。18 世紀では、特に実在の人物の個人的なやり取りを集めた書簡集で Be + V-ing 構文の頻度が高かったため、18 世紀に出版された書簡集 2000 冊以上から内容の重複する部分を除外し、出版は 19 世紀以降だが書かれたのは 18 世紀の手紙を集めた書簡集も併せると、冊数としては 350 程となった。そこから前後の文脈に照らして Be + V-ing 構文と同定できる事例を抽出し WORD に書き取る作業を進めた。これにより be 動詞と V-ing の間が離れていても Be + V-ing 構文を拾うことができ、同時に 18 世紀当時の個々の動詞の意味や、V-ing の様々な品詞にまたがる用法の実態も掴むことができた。Be + V-ing 構文採取事例数は 5000 程となった。そこからは、「状態動詞群に入れられ

てきた動詞」を取る Be + V-ing 構文に加え、always や usually などの副詞が共起し habitual pattern を表すという意味で「状態」を表している場合等も抽出することができた。状態動詞が使われている場合、及び十分状態と解釈できる状況を表す場合、を含め、Stative な状況を取る Be + V-ing 構文事例 500 程を検出することが可能となり、興味深い考察・分析結果に繋がった。

４．研究成果

（1）本研究では、Stative な事象は、17 世紀後半から現在まで、Be + V-ing 構文に生じ続けてきたことを実証することができた。殊に、実際に 18 世紀を生きた人々が、自ら見聞した考察・経験･観察対象について知人に伝える手紙文等では､Be + V-ing 構文の頻度が高いことがわかった。また､現代 Be + V-ing 構文を必要とする箇所では 18 世紀でも使われており､それに応じて Stative の Be + V-ing 構文も多く見受けられ、その割合も 10%以上に上ることが確認できた。また、状態動詞群に含められてきた動詞の多く（例えば see や sit 等）を取る Be + V-ing 構文の頻度も、18 世紀も現代とほぼ同様に高いことも確認できた。並びに、Be + V-ing 構文の出現率が現代と比べて相対的に低く見える理由も分析できた。一因として、近代では一文が独立分詞構文等で長く続く文体が多く、内容的にはほぼ同じでも、Be + V-ing 構文が一つの独立した節として現れない場合や、前置詞＋動名詞などが連なる場合が多いこと等、が挙げられる。以上により Stative かどうかは、時代を通して Be + V-ing 構文の文法性を左右し得る性質のものではないことを示すことができた。

（2）always などが共起する、所謂 habitual で形而上的に物事の一般性を表す意味での stative の Be + V-ing 構文も現代同様多く見られることが判った。叙述対象に対する話者の評価等に関わる使用傾向も、現在と酷似していることが確認でき、数値的に示すことができた。

（3）同時に本研究では、17 世紀から現在までの動詞研究記述を分析し、かつ Be + V-ing 構文の使用実例のアスペクトに関わる意味を、文脈に照らし解釈し具に考察することができた。Stative か non-stative (即ち dynamic)かは､二項対立概念ではなくスペクトラムをなすと考えた方が Stative をより良く捉えることができることも示すことができた。変化や動き(dynamic situation)の全体像を認識するには二時点以上を必要とし、一点では途中しか捉えることはできないが、stative は、どの点を取っても同じ全体像が一点で把握できる｡その意味での同質性が stative の本質である。その継続性はほぼ一瞬から永遠まで千差万別で、同じく完結性と馴染まない activity と親和性が高く、stative には意味的・語用論的に activity の意味が重層的に溶け込んでいる場合も多い。Stativity は、具体的な形而下の同質的なものとしては、物理的・心理的スタンス・知覚・心情や性向・思考など、形而上的には、物事の一定のパターンや規則性、話者が物事の理や真理等不変のものとして捉え得る。形而下の場合も、形而上的なものの範疇に入る習慣など物事の生起パターン等でも、stative は Be + V-ing 構文に少なからず生じていることが確認できた。

（4）Kranich (2010: 72)は、Be + V-ing 構文の多様な現象を包括的に説明できる基本的核機能は捉え難いとする。だが、Be + V-ing 構文を、「V-ing の表象の**途中局面**に目を向けさせる表現」と捉えれば、それが可能であることを示すこともできた。例えば I'm doubting の話者は、その気持ちが現在成立していることにはコミットしているが、今後も続くかどうかについてコミットしていないだけで、一時的なものとして認識しているとは限らない。Lowth や Webster が的確に記述している様に、 単純現在形の表す事象は、今を含め時間的に漠然と広がって成立している一方

で、Be + V-ing 構文は、それを捉える視野が相対的に限られる。以上の考察により、①stative は Be + V-ing 構文に現れ得るか否かで捉え得るものではなく、②We are seeing it の see は必ずしも non-stative だと言えないこと、③see が十分に stative であっても bounded episode と感じられるのは、その状況を眺める視野を Be + V-ing 構文が相対的に狭め、その外側にコミットしないからであることを示し、循環論を解消することができた。これらの記述の発見は、数回の国際学会においてフロアから支持を受け、十分な手応えが感じられた。

（5）並びに本研究では、18 世紀から Stative 概念に関わる動詞考察記述を網羅的に調べ、Stative 概念が辿った流れを確認できた。18 世紀末迄 stative (典型例としては love)の Be + V-ing 構文 I am loving は、構文導入及び記述の筆頭模範例であり、実際の使用と符合した。その後 I am loving は Pickbourn (1878)や Gould Brown (1751)等の痛烈な批判を浴び、規範文法から姿を消したが、実際には使われ続け、実態とは乖離している。OED に拠れば、文法用語としての Stative 自体は、19 世紀にヘブライ語の動詞範疇を示すものとして英語に入ってきた。だが、20 世紀中盤まで Be + V-ing 構文と関連付けられることはなかった。それまで Be + V-ing 構文に使えない動詞群は例の羅列に留まっていたが、1930 年前後からスラブ系言語動詞の形式を指す用語であった stative が、Be + V-ing 構文と曖昧に結びつけられ範疇化された。20 世紀後半 Comrie (1976: 49)や Langacker (1989: 254)により、stative の定義は進んだが、それはあくまで Be + V-ing 構文と相入れないというスタンスにおいてであり、21 世紀初頭で stative は Be + V-ing 構文に表れ得ない性質を持つ事象として定義および記述されるようになった。その後 non-stative とは言えない事象も Be + V-ing 構文に生じることが広く認知されるようになったが、そういった Be + V-ing 構文は、例外的かつ特殊な subjective な表現として別立てされた。しかし、subjective か否かを判断する基準が言及されることはなく、stative 概念は、更に曖昧模糊としたものとなった。本研究ではそういった曖昧性を解消し、stativity が英語では動詞の形式で identify することとは馴染まない概念であり、Be + V-ing 構文は stative の試金石にはなり得ないことを実証できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 樋口（後藤）万里子	４．巻 97
２．論文標題 『英語だけの外国語教育は失敗する』書評	５．発行年 2020年
３．雑誌名 英文学研究	６．最初と最後の頁 141-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Mariko GOTO HIGUCHI	４．巻 4
２．論文標題 Habitual Progressive and Stativity	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Journal of Cognitive Linguistics	６．最初と最後の頁 12-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　2件／うち国際学会　7件）

１．発表者名 樋口万里子
２．発表標題 BE+V-ing構文の近現代
３．学会等名 英語史研究会　32回大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Mariko Goto Higuchi
２．発表標題 The BE+V-ing form with ALWAYS-type adverbials in 18th century letters
３．学会等名 18th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Mariko Goto Higuchi
２．発表標題 A Cognitive Grammar View on the Be+V-ing Construction
３．学会等名 ICLC 16 (the 16th International Cognitive Linguistics Conference)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Mariko Higuchi Goto
２．発表標題 Pragmatics of the be+V-ing form in 18th-century English Letters
３．学会等名 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Mariko Goto Higuchi
２．発表標題 Diachronic Cognitive Analysis on the BE + V-ING Form and Stativity
３．学会等名 UK Cognitive Linguistics Conference　2020（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 樋口万里子
２．発表標題 Identifying Be + V-ing as a construction in 18th century letters
３．学会等名 第42回福岡認知言語学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 樋口万里子　（後藤万里子のペンネーム）
２．発表標題 英文法編纂と進行形記述
３．学会等名 第41回福岡認知言語学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 樋口万里子　（後藤万里子のペンネーム）
２．発表標題 300 Years of English-Grammaticography and Stativity
３．学会等名 日本英文学会九州支部第72回大会（於熊本県立大学）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mariko Higuchi Goto
２．発表標題 Profiling Stative Situations in its Relationship with the Progressive
３．学会等名 The 14th International Cognitive Linguistics Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mariko Higuchi Goto
２．発表標題 Noah Webster’s View on the Progressive and its Relationship with Stative
３．学会等名 The 15th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mariko Higuchi Goto
２．発表標題 Has the English Progressive Truly Resisted a Stative Construal?
３．学会等名 The 23rd International Conference on Historical Linguistics（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

１．著者名 辻幸夫主幹、樋口万里子，青木克仁、秋田喜美、浅井優一、朝妻恵理子、他　全80名	４．発行年 2019年
２．出版社 朝倉書店	５．総ページ数 847
３．書名 認知言語学大事典	

１．著者名 樋口万里子、他　全18名	４．発行年 2018年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 299
３．書名 認知言語学の広がり	

１．著者名 上原聡、大橋浩、濱田英人、樋口万里子、堀田優子、村尾治彦、山田仁子、他　全42名	４．発行年 2018年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 552
３．書名 ことばのパースペクティヴ	

１．著者名 菅井 三実、八木橋 宏勇、樋口万里子　他　全33名	４．発行年 2022年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 416
３．書名 認知言語学の未来に向けて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関